美術随想（2）

―海外展と常置陳列―

大和文華館館長　石澤正男

（右）笹百合（ささゆり）
（左）萱　草（かんぞう）

大和文華館の松山は今はすっかり新緑に地肌が蔽われ、すすきの株は大分たくましく伸び、笹百合と山百合も負けずにすくすくと育っています。4月早々から長い間にわたって松山全体を点々と美しく彩ってくれた淡い紫紅色のもちつつじの花は漸く終りに近ずいてきました。今見頃の花は、花木では純白のやまぼうしとうつぎの花、咲きたては純白で日がたつにつれて桃色から紫紅色に変ってゆく箱根うつぎ、薄紫のせんだんの花、人目につかない白い小花をびっしりつけているとねりこと赤いさつきなどですが、草花では路傍や草むらに矮性の月見草とみやこぐさの黄色い花、あちらこちらで白い花を風になびかせているマーガレット、ところによると紫の濃淡に変化を見せるにわせきしょうが足の踏み場に困るほど咲き乱れています。この「たより」が皆様のお手許に届く頃には美しい笹百合が草むらを彩って、鬱陶しい梅雨時の重苦しい気分を清々しくしてくれるでしょう。坂道の傍には先年吉年(よどし)先生からいたゞいた珍らしい数種の萱草が咲き、坂道の両側には夢見るようなやさしいねむの花が咲きだします。7月から8月にかけては松林を大輪の山百合が豪華に飾ってくれます。

前号では家事と育児に追われるニューヨーク郊外のある主婦が、アンリ・ルソーの「眠れるジプシー」を観に行くことによって、耐えがたい生活苦の重圧を克服した挿話を書きましたが、この話には大事な前提条件があります。それはほかでもありません。この婦人がニューヨークの近代美術館に行けばいつでも「眠れるジプシー」が彼女を待っていてくれるということです。それはなにもこの作品に限られたことではなく、欧米の美術館では、それぞれ自慢の名作は常時一定の場所に陳列するのを原則としているのです。こういう陳列法を吾々は一般に常置陳列といっております。常置陳列とはいっても全然陳列を変えないというわけではなく、時には大々的な陳列室の模様替えや作品の配置変更も行われますし、修理のために暫く撤収されることもあります。しかしそういうことは偶々行われることであって、常置陳列体制が原則であることには変りがありません。

ところで戦後の美術界で最も著しい現象の一つは国際的な美術展が頻繁に行われるようになったことといって差し支えないでしょう。そのお陰で吾々は東京、京都、大阪、時には福岡でも居ながら欧米の名作が観賞できるという、かつては思いもよらなかった幸運に恵まれています。この種の展観としては昭和22年の東京国立博物館でのマティス展が最初かと記憶していますが、その後はブラック展、29年には大規模のルーブル展、31年のこれも大規模なゴッホ展、その後は枚挙にいとまのないほど欧米の美術館所蔵の名品展が次々と催され、いつも何十万人という大衆を吸収してきました。中でも最初のルーブル展やその後ルーブル美術館からただ一点だけ出陳されたミロ島出土のヴィーナス展などは、いかに熱狂的歓迎を受けたかは今も語り草になっているほどです。京都では一日最高5万何千人かの入場者があったときゝました。こんな現象は日本ばかりではなく1965年のニューヨークの万国博にローマの聖ピエトロ寺から出品された有名なミケランジェロ作「ピエタ」のためにベルト・コンベーヤーを設けて観覧者が立止れぬようにして大観衆を処理したそうですが、話がこゝまでくると、これが美術の傑作を観賞するに相応しいあり方であるどころか、むしろ傑作に対する冒瀆の行為というべきではないでしょうか。いうまでもなく美術作品は静かな環境で心ゆくばかり観賞されるべきものであります。それは優れた作品を生んだ作者とその作品に対して吾々が当然払うべき敬意でもあります。美術館に入ると男性は必ず脱帽するのが欧米では習慣となっています。もっともこの頃は無帽が普通になったので、そんな風景はめったに見られなくなりました。

不断は常置陳列されている作品を陳列からはずして海外展を構成する最近流行の国際美術展はもうそろそろ限界点に達していると考えているのは私一人だけでしょうか。ミロ島のヴィーナスが日本に来ている間ルーブルを訪ねた人々の憤懣と失望を想像していたゞきたいものです。一番恐ろしいのは輸送に伴う危険です。万一の事があったらと想像するだけでも慄然とせざるをえません。

（5月29日記）

季刊 美のたより No.24
昭和48年6月1日
発行　大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.